

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、**友達と考えても良いこと**とする。

では、現代日本において、教育現場に求められることは何だろうか。一般的に言われているのは「考える力」をはぐくむことだとされている。いわく、知識の詰め込みは古い、というのだ。たしかに、高度経済成長期における日本は欧米の模倣をすること、模倣したことを欧米よりも早く正確に実行できることが戦後の復興を担う若い世代に求められ、ひいては教育現場にもそれを教えることが求められていたということは事実であろう。しかし、今は経済成長を遂げたのだから、詰め込み教育では次世代を担う若者が対応できない、というのはあまりにも早計ではないだろうか。

確かに安直に欧米を模倣すればいいという時代ではない。しかし、とりわけ人工知能といったハイテク分野では、アメリカをはじめとした海外から学ぶことは多くあるはずだ。また、死刑制度が残る日本は主に西欧諸国から人権問題で批判の対象とされている。ただし、日本に生きている若者が、どのような批判がなされているかを「考えて」導き出すことができるだろうか。こういった法的・道徳的問題についても、ある種の前提知識は「詰め込み」によって学ぶということを通して、はじめて「考える」という段階が可能なのである。

要するに、「詰め込み」そのものを否定するのはナンセンスで、「どこまでは詰め込み教育、どこからは考える力をはぐくむ」という「程度」の議論をするべきであろう。むしろ、情報が氾濫する二十一世紀において、一つひとつの問題や出来事に対し、「考える」ことはできない。昨今、声高に叫ばれる難民問題を、有史以来、学者や政治家が考えてきた議論を一切踏まえずして、すなわち詰め込まずして、有意義な議論ができるだろうか。今の教育現場に求められるのは「考える力をはぐくむこと」ではなく、「考えることができる知識を詰め込むこと」なのだ。

では、なぜ「考える力」を育むことに文部科学省をはじめとした日本政府が尽力しているのか、というと、二十一世紀の世界をリードする人材が日本から出てこない限り、日本の国際的な立場や経済力が衰退すると考えているからである。いや、むしろ政府としては「経済力」についてはあきらめているのかもしれない。筆者は京都大学にて開かれた経済産業省の官僚の講演にて「日本の経済規模は～にして衰退する」ということを、理路整然と、さもあたりまえの運命であるかのように説明された。本来経済産業省の役割は、日本の経済規模を拡大、せめて衰退させないことを目標とする省庁だと私は理解している（もっとも、持続可能な経済成長や国民幸福度指数といった目標もありうるだろうが、本文では割愛する）のだが、現場の官僚はあまり<sup>①</sup>その気はないらしい。少なくとも、私の出会ったその役人にそのような気概は感じられず、私は強い憤りを感じた。

話を戻すと、若者に「考える力」さえあれば、日本の国際競争力はある程度保たれるのではないか、というのが政府の見解であろう。しかし、日本最大の研究機関であり、最多の運営交付金を受け取っている東京大学ですら年間八〇〇億円の交付金（東京大学は人件費に約九〇〇億円かかっている）しかないことを考えると、小中高と「考える力」を育んだとこ

ろで、それを実験する場が日本にはないのではないが。もっとも「基礎研究は紙とペンでできる」ともいわれるが、応用研究には先立つものが必要で、応用研究こそが新たな資金源となることを考えると、いわゆる<sup>②</sup>「○○○○○○○○」という現象が起きうる、起きつつあることは十分に想像できよう。

では、小中高で本来育むべき「考える力」とは何だろうか。それは、目標達成への技術だ、というのが私の見解だ。目標達成への技術とは、自らが掲げる目標を、不断に達成し続けるための技術を言う。

具体的に、受験勉強で考えてみよう。例えば京都大学を志望した場合、多くの中高生は志望することそのものを早々にあきらめてしまう。これは「どのような目標なら実現可能か」ということを学校教育では教えないことが原因だ。本来、京都大学は偏差値六十五程度であり、上位七パーセント程度、すなわち十五人いるなかでトップになれば合格する大学であることが統計的に言えるにも関わらず、このようなデータではなく、憶測や偏見で判断し、勝手に自分の限界を見誤ってしまうのである。

また、野心をもって受験勉強を始めたとしても、「不断に達成し続ける技術」がなければ、はたと行き詰ってしまう。さて、何からするべきだろう、と。教員に質問しても「授業と宿題を頑張らなさい」と言われ、塾に通おうものなら高額授業料を請求される。本屋には無数の参考書が並び、どれを使うべきか分からず、インターネットを検索すれば<sup>③</sup>無数の玉石混交の情報から自らの学び方を選択する必要がある。

もっとも、この文章の読者が高校生であることを考慮すると、ほとんどの塾は成績を上げることをしていない。多くの塾の「合格実績」とは、もともと成績優秀な者を授業料免除で入塾させ、合格してもらった実績だ。その数字を大々的にかかげて成績優秀でない者から授業料をまきあげるとい形式が、塾の経営セミナーで教えられるぐらいである。それを証拠に「授業料全額返金」をもうけている学習塾はほとんどない。自信がないのである。

さらに、受験勉強をはじめとした他者との競争の場合、常に「目に見えない敵（＝他の受験生）」と戦うことになる。不安を感じたり、焦りを感じたりと、決して平穏ではない。これは受験勉強に限らず、スポーツや就職活動、立身出世、子育て、収入拡大、恋愛・婚約といった人生のあらゆる局面・勝負で同様の状況が起きる。

このような場合に「考える力」、すなわち目標達成への技術（＝自らが掲げる目標を、不断に達成し続けるため技術）があれば状況は一転する。

先の例で言うならば、データに基づき目標が実現可能であるということが確信できるようになる。ただの夢から、手ごたえのある目標へと変わるのだ。さらに、現在の自分の位置に真に必要な学びを冷静に分析することにより、勉強することを明確に把握できる。現在地とゴールの明確な把握ができてこそ、自身の受験勉強に最適な選択肢を、ありとあらゆる可能性の中から選ぶことができるのだ。目標と現在地との道程で訪れる不安や焦りもあれど、常にやるべきことは明確になっているので、あとはやるだけである。

もちろん、これはあくまで理想的なケースであって、失敗ももちろんするだろう。受験勉

強で言えば「常に模試の結果が右肩上がり」といったことは考えられない。ただし、通常の受験生では右往左往し、反省と称して勉強をやめてしまうケースが多い一方で、目標達成の技術を学んでいれば、再起が早い。前者では「失敗」とは「自分の人格を否定される」に等しく、後者では「失敗」とは「やり方の失敗であって、自分が悪いわけではない」と思えるからだ。

この「考える力」の良いところは、今後その学生がいかなる目標を掲げようと、いかなる困難が訪れようと、最も適した行動をとり続けることが可能になるということだ。すなわち、例えば大学合格後、異性に人気があることを目指すとすれば、①異性が何を求めているか、②自分には何が足りないか、③その足りない部分を補うには何をすべきか、の三点にフォーカスして考えることができる。本来異性に人気がある、要するにもてるためには、あるいは容姿や財力が必要であると考えられており、必ずしもそれが誤っているとも言わないが、①異性が何を求めているか、を考えずして、あるいは高額なバックをプレゼントしたり、あるいはひたすら勉強して高学歴を目指してみたりと、方向性の違う努力をしかねないのである。

現状、私たち学生は政治的発言力があまりないため、政府からは恩恵を受けられていないのが実態だ。しかし、だからこそ我々がこの日本を支え、よりよい国にしていかなければ、我々が受けている仕打ちを、我々の子々孫々にも繰り返すことになりかねない。まずは我々こそ「考える力」を身につけ、駆使し、自身の成長、ひいては日本の成長へとつなげるべきである。

シノハラ「この企画のためになんとかそれっぽい文章を書いてみた」

問1 傍線部①の指示する内容を本文から抜き出さない。

問2 傍線部②に当てはまることわざを書きなさい。○は文字数を示す。

問3 傍線部③を成し遂げる能力を一般にどのように言われるか、書きなさい。

問4 波線部「考える力」について、著者はどのような力を言っているか、一五〇文字以内で書きなさい。

五十点満点（配点 問1～3 十点／問4 廿点）

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、**友達と考えても良い**こととする。

この文章では、部長が一番偉く、係長が二番目、新入社員が一番下だと理解して構わない。遠藤は二四歳の新入社員。浜田は三八歳の係長であり、遠藤の直属の上司である。

「すみません、浜田さん。少し、お時間よろしいですか？」

一二月上旬。経理部会議が終わった後、遠藤は勇気を振り絞って浜田に声をかけた。

「うん？少しだけなら。」と浜田は怪訝そうにこちらを見た。会議室から他の社員が全員出払い、二人きりになったところで、遠藤は生唾を一度飲んで、一息に言った。

「会社を辞めようと思います。」

「えっ。」

「せっかく育てていただいたにもかかわらず、申し訳ありません。今期<sup>①</sup>決算が終わる一月末に会社を辞めます。」あえて辞めます、と言い切った。人生が終わった、と思った。

「そうですか……。」浜田は悩ましい顔をした。

その場では一分程度でやりとりが終わり、遠藤と浜田は会議室を後にした。遠藤は終始落ち着かなかった。このまま、何事もなく一七時に帰りたい、早く帰りたい、と思った。辞めると言ってしまったのだ。居心地が悪い。一月末まで、あと二か月は出勤しないとイケないのだが、とりあえず今日、妙に早く帰りたくて仕方がなかった。一六時になり、もう自身の仕事が終わりに、ただただそわそわしていると、浜田からメールが来た。

『From 浜田係長 To 遠藤さん 一八時まで会社に残っててください。』

『From 遠藤 To 浜田係長 了解いたしました。お忙しい中、大変申し訳ございません。』

遠藤は、フンと鼻息を鳴らした。何を言われるのか。

一八時一五分ころになり、浜田が遠藤に声をかけた。浜田は、先ほどまであわただしく仕事をしていた。また仕事を押し付けられたらしい。

「遠藤さん、お待たせしました。じゃあ…」

「はい。すみません、お手数をおかけします。」

「ここじゃ少しあれなので…」

浜田はあえて近くの会議室ではなく、社長室の横に隣接する、人通りの少ない会議室に遠藤を連行した。

「遠藤さん、会社を辞めるって私に相談してくれたけど、今はまだ誰にも言ってません。部長にも、人事にも。一度、しっかりと相談しましょう。何かあったんですか？」

「本当に申し訳ないと思っています。実は大学時代に起業してから、ずっと自分でやっていた副業があるのですが、これを本業として専念すべく、会社を辞めたいです。」

「そうですか。会社が嫌なわけではないんですね。」

「はい。この会社は、有名で、信用もあり、福利厚生もしっかりしていて、安定していて、給料も高く、本当に素晴らしい会社だと思います。」

「では、会社を辞めず、今の副業はそのまま続ければいいじゃないですか。」

「いえ、この会社の忙しさでは、いずれ副業は続けられなくなる、と思いました。」

部署の中で最も多忙な浜田は、否定しかねた。

「遠藤さんほど能力があれば、大丈夫ですよ。兼業にチャレンジしてみてもは。」

「自分の中では、この会社で上を目指すか、大学時代の起業を本業にするかの二択だと思っています。両立は、どっちつかずになると考えています。」

「では、この会社でもうちょっと頑張ってみるのはいかがですか。」

「いえ、悩んだ結果…」遠藤が続けようとする、さえぎるように浜田が言う。

「入社してまだ一年ではないですか。もう少し社会人経験を積むのも良いと思いますよ。社会人経験は、周りからの評価につながります。」

「その通りだと思います。」浜田がたたみかける。

「遠藤さんもわかっている通り、うちほどの会社はあまりありませんよ。」

「承知しております。最高の会社・条件だと思います。」

「ではなぜ辞めるのですか？」

遠藤は、自分の中では入社してすぐにわかっていた答えを、わかっているが誰にも言えなかった答えを、はじめて他人に告げた。

「この仕事をやるために、生まれてきたのではありません。」

浜田は、虚を突かれたように、ハッとした顔をした。しかし、すぐにいつもの顔に戻る。

「……。まだ、経理の仕事は一年もしていないと思います。まだまだ奥が深く、遠藤さんの能力を活かせる領域もあります。遠藤さんの決断力は評価していますよ。」

「おっしゃる通りです。まだまだ経理の仕事を知りません。ただ、面白くありません。」

「たしかに、今の仕事では面白さを感じることはないかもしれませんが。」

「いえ、仕事が面白くないのは、お給料をいただいているので我慢すべきだと思っています。ただ、自分がこの会社で何十年と仕事をすると、その生き方が面白くありません。」

「……。生き方、ですか？」

「人生において、これほどの条件の良い会社を辞めることは、客観的に見て損だと思います。ですが、自分の生き方を考えた時に、本当に自分のやりたい仕事があるにもかかわらずそれに本腰を入れず、自分が面白くない仕事を安定のために優先するという生き方は、私自身が面白い生き方ではありません。」

「……。遠藤さんはいつも真っ先に帰っていますし、それだけ仕事が早く終わるなら、やりたい仕事との両立も可能なはずです。」

「先ほども申し上げたように、先輩社員の方が忙しそうな様子を見ていると、いずれ両立はできなくなると考えています。」

「その判断は、もう少し働いてからでも遅くないのでは。」

「先ほども申し上げたように……」

浜田は、ずっと同じ問いを繰り返し、繰り返し問うた。遠藤は、ずっと同じ答えを、繰り返し、繰り返し答えた。我慢比べだと思った。ここで「わかりました、会社を続けます。」と

言っただめだと思った。何時間たっただろうか。根負けした浜田は、

「わかりました、もう今日は遅いので…」

と言って席を立った。遠藤は、汗をびっしょりかいているのを感じた。会議室から自分の机に戻って時計を見ると二十一時になろうとしていた。浜田は、あわただしくパソコンを開いて自分の仕事を再開していた。

(中略)

一月最後の経理部会議の日。

この日まで、遠藤が辞めることは浜田と一部の社員（人事部と辞める人の直属の上司）だけが知っている。この日はじめて、全社員にメールで告知され、部署の会議でも発表される。経理部三〇名ほどの前で、辞めることを宣告される。新入社員で会社を辞める。人生において、これほどの汚点があろうか。社会的信用は一気に失われ、再就職も厳しくなる。

部長は、会議の主なテーマである決算報告について一通り話し終えた後、一息ついた。

「さて。」

きたか、と思った。遠藤は、死刑宣告をされるように感じた。うつむく。

「最後に、大変残念ながら、今月でわが社を辞める人が、経理部から二人います。」

(二人?) 遠藤は驚いて顔を上げた。部長は続ける。

「一人は、遠藤くん。そして、もう一人は浜田係長。」

(浜田さん?! ) 遠藤は、思わず浜田の方を見た。浜田はまっすぐに前を向いている。

部長は、さも残念そうに促した。

「では、まず、浜田係長。一言いいかな？」

「はい。」まっすぐと前を向いたまま、浜田は立ち上がった。

「私の実力不足で、会社の要求に応えることができず、休日出勤や残業を多くすることになってしまいました。その結果、家族、特に娘と過ごせる時間が大きく減ってしまいました。みなさまに大変ご迷惑をおかけしてしまい申し訳なく思います。私の人生においてこれまで有意義な仕事をさせていただいたことは大変光栄に思いますが…」

一拍、間をとった。

「家族との時間を犠牲にすることは、私の生き方ではありません。」

シノハラ「実在するいかなる人物・企業とも関係がありません。」

問 波線部「生き方」について、本文を踏まえ、あくまで「現代文」として、二〇〇文字以内で説明しなさい。

- 
- i 東京大学平成二十八年予算 (<https://www.u-tokyo.ac.jp/content/400039993.pdf>)
  - ii 経理の仕事で最も重要な仕事。これがある時期（一月など）は多忙を極める。